

夢 塾 だ よ り

～ いい文章を綴ることへの憧憬 ～ (第23号)

令和元年 6月14日



『夢塾だより』を書きはじめた今回で23回目となりました。塾の親御さんから、「『夢』だより、毎月楽しみに読んでますよ。東京の娘にも読ませていますよ」との声に『夢塾だより』を『「夢」だより』と書いてくださったIさんに感動しました。「ゆめ」が届けられる「夢だより」に改めようかなと思いました。毎回、いっぴしのコラムニストになったつもりで、クラシックを

ききながら書いています。ですが、すらすら書ける時と、なかなか書けない「好調・不調」の波があるのです。今回はなかなか書けません。「いい文章とは読んだあとにさわやかな読後感の残る文章だ」とのある作家の言葉が私の目指すところで、そういう「たより」に近づけるように努力しています。

作家の森絵都さんは(みかづきの作者)依頼された執筆の仕事が書けないときのつらさを次のように言っています『書いても書いてもいいと思えないのです。仕方がないので何度も何度も書き直します。洞窟の深みで一条の光を追うように、少しでも原稿がマシになる道筋を探るのです。胃も痛みます。心も荒れます。ごはんも美味しくなくなります。・・・しかし、あるとき、気がつきました。私が七転八倒の末に仕上げた時の方が、好調の波の中ですらすらと書いた原稿よりも他者からの受けが良かったりするのです。・・・執筆時の苦しみこそが原稿に味わいを与えているのだ思えるようになりました。・・・恐れるべきはむしろすらすら書ける時なんです』と・・・

転じて私たちの生活にも「好調・不調の法則」があるように思います。何をやっても上手くいかない。毎日が苦しい。そんな時は今よりも高いところへ向かっているから、心に負荷がかかっている辛いのです。筋肉を培っている時期なのです。逆に毎日ルンルンだ。何をやってもうまくいく。なんていうときこそ注意が必要です。坂道を転がり落ちている時かもしれません。

「何で数学Ⅲをとってしまったのだろう。全然分からない、苦しすぎる」と嘆いたRさん。苦しい今が上り坂を登っている時なのよ。嘆く必要などないよ。